

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
村松 秀	男 性	17 歳	豊川市 (北設楽郡津具村)

「父母の慰霊でやっと終戦」

「東三河郷開拓団からの手紙」より
(部分修正)

昭和18年に満州国に渡り、終戦後の約1年間を現地で過ごし、日本に引き揚げてきました。満州に渡った昭和18年は、私は現在の学年で言えば中学2年生になると思います。父母に連れられて満州黒龍江省甘南県三合屯というソ連国境に近い所まで行きました。日本の国、内地では戦争を始めて2年あまりも経っていて、食料や医療がなくなって困るようになっていました。

満州ではお米は取れなかったけれど、畑でできる作物はたくさん収穫していました。大麦、小麦、トウモロコシ、コウリヤン等、また野菜類は内地でできるほとんどのものが収穫できたように記憶しています。畑の大きさも1枚が何町歩(何ha)もあって、畑の向こうは遠くて見えなくなるほどの大きな畑が続いていました。草原も中に立って四方を見渡すと、地球は本当に丸いのだなと思ったものです。山もなく高い丘だと思ってそこへ行ってみても、遠くで見た丘はやはり平らな草原の真ん中なのです。本当に広い所です。馬や牛がのんびりと5頭、10頭と群れになって草を食べます。やがて来る冬に備えてたくさん食べて寒い冬に備えるのです。冬になると緑の草原も草が枯れて、一面の雪となってしまいます。氷点下30度にも気温が下がります。冬になると外での仕事はあまりできませんが、それでも秋に収穫した作物の脱穀や、来年の燃料にする枯れ草を大きな鎌を使って刈り取る仕事もしました。

娯楽といえ、馬に乗って走ったり、何頭かの馬で競馬のまねをしたり、また、野ウサギをワナで捕ったりして遊んだものです。そんなのんびりとした生活も、昭和20年の終戦という日を境に日一日と悪くなっていきました。毎日のように匪賊の襲撃に遭い、開拓団の人たちの衣料品、食料、生活用品等何でも手当たり次第に略奪されました。

私たちは食べるものもなくなり、次第に個人では生活できなくなり、開拓団の全員が隣にあった別の開拓団に避難し、集団で生活をする



広大な耕地 東三河郷開拓アルバムより

ことになりました。

そこでの生活も食料があるうちは何とかなっていたのですが、だんだんと食料も少なくなり、栄養不良のうえに伝染病の発生があり、医者も薬もない所で治療もできず、多くの人たちが次々と亡くなっていきました。集団生活もできなくなって、いよいよ私たちは難民の生活です。現在でもどこかで戦争があれば、テレビの画面には難民とよばれる人々が食べるものもない、着る物もない、住む家もないような光景が映されています。戦争が始まって一番に苦勞をし、悲惨な目に遭うのは力の弱い女性、子どもたちです。私たち開拓団の人々は、その悲惨な難民生活を体験してきました。現在では多くの国々の人々が難民に対していろいろと援助をしています。私たちにはそんな援助はありませんでした。引き揚げの連絡があるまでは、各人一人一人が自分の生き方を考え、生活をしなければならなかったのです。食べられるものは何でも食べました。それでも犠牲者が出てきました。体力のない老人、幼児、体力がなければ生きてはいけないのです。私も父、母を亡くしました。当時私が17歳、弟が13歳と5歳でした。3人揃って何とか無事に日本へ帰ってこることができました。お父さんやお母さんが見守ってくれたものと感謝しています。

日本に帰ってきて40数年経ちました。平成2年、今年の9月に旧満州開拓団の人たち13名と共に、父母の亡くなった地を訪ねることができました。難民生活をしながら1ヶ月、2ヶ月かかって帰ってきた路をジェット機と鉄道を使って5日間で行くことができました。現地では私の父母たちや現地で帰国を待ちながら亡くなられた人々の慰霊祭をしてきました。私の心の中にあった戦争がようやく一つ終わったような気持ちで毎日を過ごすことができるようになりました。慰霊祭をした所の土を持って帰り、お墓にも入れてあげました。父母もようやく日本の土に帰ってきたことと思います。

平成2年11月1日

(記録者 伊藤 厚志さん)